

## 空間体験と自己感覚：学生相談室の場所

相談員 高森 淳一

現代の都市生活において贅沢とは、静謐な空間と清浄な空気・水であるように思われます。心理的な相談では、清浄な空気・水はさておき、静謐で快適な空間、場所が必要とされます。普段のちょっとした相談事を考えてみても、ふつうは、まずだれかれ構わず相談するのではなく相手を選ぶわけですが、それだけではなく、話をする場所柄もおのず選んでいるはずです。慌しくひとが行き来するような開放空間で相談はしないでしょう。

このように少し考えてみただけでも、相談業務にあたる者にとって空間・場所というものは一考の価値があると思います。そこで、空間・場所について少し述べてみようと思います。

空間といつても、主体と相対し対象化された物理的空間ではなく、主体がその中に置かれ、かつ主体的・主観的に生きている空間が問題となります。かといって、それは単なる主観の構成物ではありません。ちょうど和辻哲郎が、自分の論じる「風土」とは単なる自然環境ではなく、人が己を見出す仕方、自己了解の仕方であると規定し、たとえば「我々は空気の爽やかさにおいて我々自身を了解している」と言うのと相通じるものがあります。空気の爽やかさは空気というものに属してはいても空気自身ではなく、また空気の性質でもない。かといってそれは心的状態でもなく、あくまでも空気の爽やかさです。

現代では交通手段の発達によって世界は狭くなり、場所の象徴性が失われたことで、場所についての感覚がずいぶんと希薄になっているのではないでしょうか。それに加えて、インターネットの普及が、ひとつとの locality 自体を根本から変えたように思います。世界のどんな場所にいても、仮想の電子空間内で、たとえば自分の年齢や性別を隠してあるいは架空の存在となり、チャットにうち興じることができる。そこでは自分がどこにいて、どんな身体的特性を有しているかはさして問題となりません。いわば空間を占めることのない精神だけがたゆたっているといった自己感覚があるのかもしれません。対人関係が苦手なひとのなかには、こうしたチャットの方が、実際に人と対面しているときよりも、はるかに自分が出せる、思っていることが言えるというひとがいます。

とはいっても、ひとが生身の肉体を所有する（正確にはひとが肉体である）以上、かりに「三界広しといへども、五尺の身置き所なし」と感じたとしても、身体空間とその身体空間が置かれている空間（世界）からわが身を引き剥がすことはできず、頭上足下、前面背面の区別がある以上、生きられる空間には主体的・主観的な意味の分節化が生じます。精神病理学的に変質するのはきっと背後空間であって、おんぶおぼけ（実体的意識性）が迫ってくるのも、当然背後からです。悪口は面と向かってではなく、裏で、背後で言われていると感じるものです。

実際のところ、空間をどう体験するかは、そのひとの自己感覚と緊密に連動していると思われます。つまり、空間がどのように体験されるかということと、自己が自己をどのように感受するかということとは、帰するところひとつなのでしょう。

本学の学生相談室は、開設以来、引越し、引越しで、計3箇所の場所で相談業務にあたってきました。開設して6年目ですから、平均すると2年に1回の割りで引越しをなわけです。最初、正門からも近い、学生用掲示板の向かいにある自習室の一角を間仕切りして出来た部屋でした。

窓の外には、ちょっとした植え込みを挟んで学生が頻繁に往来しているような場所です。次は大学附置機関である心理臨床センターの一隅を間借り。場所としては主要な事務部署が2階にある新築校舎の3階でした。同じ3階には少人数用の教室も若干ありましたが、心理臨床センターが外部向け相談機関であるため場所も独立していて、近辺は学生をはじめ人通りもまばらといった感じでした。3箇所目が、現在の場所で、ほとんど利用されていない経年の校舎の3階で、中程度の教室をいくつかに間仕切りして出来た部屋です（占有面積、面接室の数は以前に比べて格段にふえました）。建物自体は、学校敷地内では周辺の奥まった場所にあります。不審者が出没するようで、ちなみに、わたしと廊下ですれ違った利用者がそのあとで担当の相談員に、あれは不審者でしょうかと尋ねたなどということもあります。

いづれの引越し場所もスタッフが選定したのではありませんが、いわばどんどん人通りから奥まった、人目につきにくい場所へと移転してきたわけです。こうした場所の移転は、はからずも、場所というものが心理相談にどのように影響するかの実験となつたようでした。

最初の場所では、数名の友達づれでわりと気軽な気持ちで、心理テストをやってるって聞いたから、ちょっと受けようと思って来たんですけど、という学生さんがしばしば来られましたが、現在はこうした来談は皆無といつても良いでしょう。移転で相談室の場所が人通りから奥まるにつれ、全般的には、いわゆる重たいひとがよく来談するようになりました。むろん、こうした傾向は移転の要因だけでは説明がつかないのでしょうが、場所が一因となっていることは確かなようです。

また、最初のところでは、その場所で相談することについて、不安を訴えるひとがしばしばありました。来室した際に知人と会うのではないか、あるいは相談した後、部屋を出ると（そこは自習室ですから）いきなり友人と鉢合わせしないか、話が部屋の外に漏れないか、外にいる人が気になるといったものでした。来談するのに人の目が気になるというのは一般的かもしれません、そういうひとたちは、面接室のなかでも落ち着かないようでした。場所への不安は相談の始めに語られますが、こうしたこと口にするひとは、きまって自己感覚に難点を抱えていることが、続く相談経過で明らかとなりました。同様のことが何度もづくうちに、自己感覚について場所がちょうどリトマス紙のような働きをしているのだな、と思えてきました。

こうした不安を述べるひとは、自己の境界が脆弱で、自己が開け放しの状態にあって曝されていると感じ、それでいて自分の方からは世界に手が届かないと感じていました。

こうしたひとたちがすべて境界例というのではないのですが、境界例と判断する指標として、辻悟（1991）は、「身をおく状況への自分の合一的な移し替え幻想」を挙げ、その具体的ひとつに、身をおく空間への合一的移し替えを論じています。それは幻想というより、自己感覚と表裏一体の現象として考えた方が良さそうですが、たとえば自己嫌悪がそのまま内省による自覚となるのではなく、こんな場所に居たくないと体験されます。こうした自己感覚からは、別の大学に変わりさえすれば、自分もたちまちに変われるはずだという考えが容易に出てきます。

そこで生じているのは、主体（主観）の空間化であり、空間の主体化（主観化）です。面接空間に特化していえば、クライエントの心の内的空間が身体空間を越えて広がりゆき、面接空間と重なるといった現象です。あるクライエントは、罪悪感と関連して、自分がここに来るのは申し訳ない、自分がここに来ていることで、自分よりももっと苦しんでいる人がせっかく

予約しようとしても予約が取れない、と語ります。自分がその場所を占めることで他のひとの場所を奪ってしまう、と体験されているのでしょうか。

たとえばまた、こんなこともあります。わたしの方は指摘されるまで気づかなかったのですが、相談に使っているソファの位置が、前回と若干変わっており、クライエントはそれにひどく違和感を覚えたようでした。指摘されると、たしかにソファの位置はずれており、クライエントとカウンセラー（筆者）との距離が先週よりわずかに広くなっていました。その違和感を尋ねてゆくと、きっと先生がぼくを疎ましく思ってソファを遠くに離したに違いないと思った、とのことでした。そこでは、心理的に距離をとられるのではないかという内的不安体験と空間的距離の体験が二重写しになっています。

こうした主体の空間化、空間の主体化はその時々の自己存在の在りようによって、うえに述べたように顕著になるのですが、根本的には、程度の差こそあれ、およそ生きているかぎりたえることなく生じているのです。主体と空間との関係はいわば、水中にいる魚が水に相対しているのではなく、たえず水に周囲を取り巻かれ、水に浸透されているのと同じです。

日本語では、人称代名詞はしばしば、たとえば「あなた」、「おまえ」、「うち」が同時に「彼方」、「御前」、「家・内」という具合に空間指示的であり、また固有名詞であっても六条御息所といったふうに場所をもって個人を名指すことがあり、そうしたことなどが、自己のもつ場所的性格を傍証すると言えるでしょう。

相談業務では、こうした主体化（主観化）された空間が新たな自己生成の場となるのです。空間が生成に役立つのは、それが「空」であるからです。空といつてもカラではなく、充実せる「空」です。岡倉天心が『茶の本』(The Book of Tea) で面白いことを述べている紹介しておきましょう。

「たとえば室の本質は、屋根と壁に囲まれた空虚なところに見出すことができるのであって、屋根や壁そのものにはない。水差しの役に立つところは水を注ぎ込むことのできる空所にあって、その形状や製品のいかんには存しない。虚はすべてのものを含有するから万能である。虚においてのみ運動が可能となる。おのれを虚にして他を自由に入らせる事のできる人は、すべての立場を自由に行動することができるようになるであろう。」

こうした創生的「空」の性質を担った場所、つまりクライエントの置かれる相談空間はカウンセラーによって holdされるべきであり、また学生相談室は、それが置かれている大学によって然るべく holdされる必要があるでしょう。

場所が holdされるといつても、それは囲い込まれて風通しが悪くなることを意味するのではなく、そこに颯々たる風も吹き込まなければなりません。場所は風/土であるからです。本学の学生相談室に、ひいては本学にこれからいかなる風土が生じてくるか、楽しみです。

【追記】：脱稿後、小坂相談員と来し方の記憶の糸をたどっていると、相談室全体として心理臨床センターの一角を間借りする以前に、空き時間の範囲で一室だけ拝借し、自習室の場所と併用していた時期のあったことがわかりました。いわれるまで全く失念していました。相談室の環境について、運営委員会でわたしがいたく憤然として改善を求め、交渉の結果そのようになったとのことでした。ええ、よく覚えていますよ、と小坂相談員。小坂先生の明晰なる記憶力に感謝いたします。